● 3日目：復興支援ボランティア

ボランティアの現場となる「伊藤農園」は、かつて農業を営んでいた伊藤夫妻の農地です。震災前は、いわき市内小学校の児童たちが、農作業や稲の収穫体験に親しむ場「学校田」として利用されていました。

現在は「ふくしまオーガニック・コットン・プロジェクト」の支援によって、オーガニックコットンが栽培されています。この伊藤農園で、「草取り」や水はけをよくする「畔堀（あぜほり）」などの作業を行いました。

●感想

農家の方の苦労や大変さを身をもって感じることができた。自分が物を食べるとき、身に付けるとき、そこまでにはどのような過程があったかを想像して、ありがたみを感じるよう心掛けたい。	生徒
放射能の影響で使えなくなった、使う人がいなくなった畑を元のようにしたいと言って活動している人がいることを知り、元の状態を取り戻すために、少しでも貢献したい。	生徒
作業だけでなく、ボランティアを受け入れてくれた方とお話しもできて、素敵な活動となった。	生徒
今回のボランティア活動は綿花の農作業であったが、そこで行ったことは災害時にも通じるものがある。自己と他人との連携であった。このボランティア活動は、単なる農作業ではなかった。	生徒
コットンを収穫することはできなかったが、次は、自分から福島に出向き、コットン収穫のボランティアに参加したい。	生徒
原発事故、風評被害に負けず「食べ物がダメなら衣服を作ろう」という強い心をもって挑戦する気持ちがあったことが見習うべき点である。どんなに辛い状況でも諦めないことの強さ、大切さを学んだ。	生徒
現地に赴いて支援すること以外にも、ここで栽培されたコットンを使用して作られた商品を購入することで継続的に支援ができると思う。校内でも何かできるか、また生徒自身に身近で何ができるかを考えさせたい。	教員
復興に貢献できるし、ここには多くの学びがあると感じた。機会を作って今回参加できなかった生徒を被災地支援に連れて行きたい。	教員
３日間で学び体験したことの集大成がこのボランティアであったと思う。福島県と東日本大震災と原発事故、その全ての要素と未来の縮図がこのボランティアに詰め込まれていた。	教員

●宿泊研修の振り返り

　オーガニックコットンを栽培する、いわき市の「伊藤農園」でのボランティア作業を終えた後、宿泊研修の振り返りが行われました。今回の研修で感じたこと、思ったことなどを「学び」「備え」「体験」の三つの視点から班内で意見を出し合い、「まとめ」としての考えを導きました。